

2015年9月、国連は、新たな目標として採択した「SDGs（持続可能な開発目標）」に、17の目標を設定した。日本としても、さまざまな団体、組織、個人がそれぞれの立場の中で取り組みを始めている。

私は、今年度担当する「地球環境論」の春学期授業の中で、さまざまな自治体、企業、大学などが「SDGs」に基づいて取り組む事例を紹介してきた。そして、期末テストの一つの設問として、「天理大学として『SDGs』を実践するには、どのような方法・内容が考えられるか？ 具体的な事例をあげて説明しなさい」という課題を出した。

受講生263名から、複数回答可という条件で得られた回答数は、合計673項目（事例）数だった。そのうち、17の目標内容とは少し異なる意見として、169項目（全項目の25.1%）の回答を得た。少し異なるとはいえ、これらの項目は、むしろ天理大学に特化した、言い換えれば、天理大学の「建学の精神」に則った独自の「SDGs」ともいえる回答だった。

そこで、前号では、得られた169項目を新たに7つの“目標”に区分し、それぞれの項目数について列挙したが、本号では、それぞれの項目内容について、以下に具体的内容を示す。

天理大学は、「建学の精神」として「宗教性」、「国際性」、「貢献性」の三つの柱を置いている。分析に供した7つの“目標”の一つ、「建学の精神に基づく三つの柱」に関しては、169項目のうち11項目が該当した。ちなみに、この項目を回答した受講生は、全員が1年次生だった。このことは、入学して間もない1年次生が、「SDGs」の根底に「建学の精神」をはっきりと意識し、心の中に納めていたことを表している。

平成13年1月26日（天理教では「春季大祭」の日）、インド西部グジャラート州でM7.9の巨大地震が起きた。天理大学は、教職員・学生による被災者への救済、寄り添い、復興を目的とした「国際参加プロジェクト」を立ち上げた。これを契機に、このプロジェクトは毎年続けられることになった。この“目標”「国際貢献・国際参加プロジェクト」を事例に挙げた受講生は51名（項目数）で、この項目数は7つの“目標”の中で最も多かった。このプロジェクトも、「他者への献身」を目的とした継続企画であり、「国際性」、「貢献性」を全面に打ち出した「建学の精神」の実践例である。

また、天理大学は二つの重要な「宣言」を発表している。一つは、平成24年4月23日（創立記念日）に発表した「天理大学エコキャンパス宣言」である。奈良県内の大学では初の「宣言」である。趣旨に、「地球環境問題の重要性を認識し、環境保全に配慮した教育・研究の充実を図るとともに、緑あふれるキャンパス内の自然環境を大切に、ものを大切にす心の涵養とその実践に努めます」とある。また続けて、「建学の精神に基づく『貢献性』、すなわち他者への献身を行動の指針に掲げ、そのためのひのきしん（ボランティア活動）を学生と教職員が『一手一つ』になって推進することをめざします」とも記されている。この“目標”「エコキャンパス宣言」の実践を具体的

事例として挙げたのは2名（項目数）だった。ちなみにその2名は、2回生以上の受講生だった。

もう一つは、平成25年10月10日に発表した「天理大学スポーツ宣言」である。この宣言は、「天理スピリットに基づき、共に助け合い、他者の幸せのために貢献する優れたスポーツ人の養成に全力で取り組む」ことを目的とし、五つの行動方針を具体的に示した。その方針の中に、「2. 謙虚さをもって多くを学び、みずから律する強さをもち、天理スピリットを体現する優れたスポーツ人養成のため尽力します」と、「4. 専門的知識や技術をもとに個性を生かした指導をおこない、みずから率先して行動し、チーム力を高める魅力的なスポーツリーダーを育成します」の二つが含まれている。このように、「他者への献身」を基本にした「天理スピリット」と「魅力的なスポーツリーダーの育成」を実践例とする、“目標”「スポーツの普及と指導」を挙げたのは36名（項目数）だった。ちなみに36名は、学年に関わらない、運動部所属の学生がほとんどだった。

その他の回答には、天理大学は社会との関わりを積極的に推し進めてはどうか、という内容も多かった。たとえば、大学の敷地内に農作業ができる畑を造成し、そこで野菜などを栽培してはどうか。収穫した農産物は学内の食堂へ提供し、余剰分は地域で販売する。いわゆる「地産地消」を実践してはどうかという提言である。また畑の農作業や食堂での調理作業には学生も交代で加わるなど、エコファーマーの育成や農業振興を目的にした“目標”「天大として農産物の地産地消」に関する実践例を挙げたのは、20名（項目数）だった。

また、天理大学は、畑で収穫した農産物や賞味期限1カ月前の食品を学内外から集め、それらを「フードバンク」へ提供する、あるいは、それらを貧困家庭の子どもへ直接提供する「子ども食堂」の開設など、食べ物の有効活用を促す意見があった。これらの活動は「他者への献身」の一環であり、教職員・学生が一緒になって実践することが望ましいという意見もあった。このような活動を促す、“目標”「子ども食堂・フードバンク」に関する回答者は16名（項目数）だった。

天理大学の「建学の精神」の一つである「宗教性」との関連では、「物を大切にす」、「菜の葉1枚でも無駄にしない」、「皺紙も伸ばして使う」など、天理教の教理との関連性を考え、協働して実践する“目標”「天理教との協働・実践」を提言する回答者は33名（項目数）だった。特に「天理大学よふばく会」などとの協働を強く促す意見もあった。

以上、今年度、期末テストの設問として出題した「SDGs」に係る回答は全部で673項目数で、そのうち17目標に関する回答は504項目数、天理大学の「建学の精神」に則った独自の回答は169項目数だった。このように、回答項目数の約25%（169項目数）が「建学の精神」を根底に置いた回答だったことは、予想外だった。また、「国際参加プロジェクト」や「天理スピリット」についての関心も高く、天理教教理との関係性についても高い関心があることが示された。この三つの“目標”で全体の71%を占めたことにも驚いた。（つづく）